

障害は障がい者の側ではなく 社会の側にある

原口総務大臣 「チャレンジドをタックスペイヤーに(障がい者を納税者に)」というのが私の基本的な理念です。竹中ナミさん、ナミねえと呼ばせてもらいますね。ナミねえと初めて出会ったのは10年前の7月2日、ちょうど私の誕生日でした。

その後、私は国連の障害者権利条約推進議員連盟の副会長になり、条文案を作ってきました。「チャレンジドをタックスペイヤーに」という活動のモデルは、ナミねえのプロップ・ステーションであり、もう一つがスウェーデンの福祉企業体サムハルです。サムハルは人口900万人のスウェーデンで、3万人の障がい者を雇用している会社です。そこでは「障害というのはその人の中にあるのではなく、社会の側にある。その社会の側にある障害を取り除いていく」という考え方で運営されています。ICTというのは社会の側にあるバリアを取り除くための一つの道具です。できないことが問題なのではなく、できることが大事なことです。

竹中ナミ(ナミねえ) チャレンジド一人ひとりにいろいろな可能性が眠っています。それを眠らしたままにしていることはもったいないことではないわけで、それを引き出す方法はICTのような情報技術であれ、プロの手であれ、法律改正であれ、ありとあらゆる方法を使って、その人の力を社会で発揮していただいて、その人が誇り高く生きてもらうことと考えています。

そしてできれば、仕事をした結果、タックスペイヤーになっていただくことで、働くことが不可能な重度の障がい者のように、社会から

丸々守っていただかないと生きていけない人たちをきちんと保障する原資も得られるんです。若くて元気な人たちが働いて支えるよ、というような国はもう持たない。原口さんのすごいところは、そのことを政治家という以前に人間として深く理解されていることだと思います。原口 生きずらさや働きずらさを感じている人がナミねえに会ったら、「自分でもきんだ」ということを理解します。私は小学生のころ家庭環境もあって、学校になかなか行けず、たまに行くと親が職員室に呼ばれるという状態でした。小学校5年生の時に先生が、『君の可能性』(斎藤喜博著)という本を下さったのです。そこには島秋人さんという死刑囚のことが書かれていました。褒められたことがなく、結局人を殺め

て死刑になるんですが、獄中で短歌を作るようになります。たった一回絵を褒めてもらった先生に手紙を出して、「あなたにはこんな良いところがあるよ」ということを教えてもらって、最後はすぐきれいな歌を残されたのです。

私は学校に行っても自分のイスはなかった。名簿には載っているけれど、私の居る場所はなかった。魂が乾いていたんです。生まれて来なければよかったとさえ思っていました。先生がその本を通して、私の中にも無限の可能性があるんだ、ということを教えてくれました。その本に出会っていなければ、今頃荒ぶる力がどうなっていたかわかりません。ナミねえにお会いした時、その先生にお会いしたような思いがしました。

情報共有型の ICT協働教育

ナミねえ ICTは本当にすごい可能性のある道具です。最初は身体障がいのある人たちの視覚、聴覚、身体の補完に使われましたが、今は発達障がい、精神障がい、知的ハ



原口

Haraguchi Kazuhiro

総務大臣
内閣府特命担当大臣(地域主権推進)

昭和34年 佐賀県生まれ
昭和58年3月 東京大学文学部心理学科(第4類心理学)卒業
昭和62年4月 佐賀県議会議員当選(2期)
平成8年10月 衆議院議員に当選(以降当選5回)
平成16年10月 財務金融委員会民主政策部理事
平成17年9月 郵政民営化に関する特別委員会審議理事
平成19年10月 総務委員会審議理事
平成21年9月 総務大臣

原口一博総務大臣と竹中ナミ社会福祉法人プロップ・ステーション理事長は、「チャレンジドをタックスペイヤーに(障がい者を納税者に)」という同じ目標を持って、それぞれの取り組みを地道に続けてきたという共通点を持つ。障がい者が誇りを持って生きていける差別のない社会の実現に向けた新政策での取り組みや、そのためのICT活用の可能性、そして地上デジタル放送の「CM字幕問題」など、2010年を離れるために語り合っていた。

(構成・遠辺元 本誌編集部 写真・石倉根理博)



一博